この人と60分

地域主体でみんな幸せ

バンコクの都心部。広さ3000平方メートルの敷地に、緑あふれる幼稚園がある。

「先生が教え込むのではなく、母性と父性が子供の発展を促すもの」との信念を持つ。7年ごとの成長期に区分して精神的自立を目指すシュタイナー教育に則し、幼児教育を実践。遊具や食べ物など天然素材にもこだわる。

自立を支援

秋田県由利本荘市に生まれ育ち、南にあこがれた。ベトナム戦争中の大学時代、ベトナムに関心を持つ日本人は多く、佐藤さんは戦下の普通の人々の暮らしに興味を持った。大学2年で障害者の生活支援ボランティアを開始。卒業後も企業には就職せず、一貫してNGO畑を歩んできた。

24歳だった1973年、日本YMCA同盟のベトナム難民支援ボランティアへ向かう途中、初めてタイに。その後バングラデシュなどでも支援に携わり、82年からタイに住む。東北部ブリラム県で、農民と一緒になって井戸掘りをした体験が忘れられなかった。

日本国際ボランティアセンター（JVC）バンコク所長、国際協力機構（JICA）タイ国別援助計画研究会アドバイザーなどを歴任。「障害者問題でも、貧困問題でも、地域が主体になることで自立でき、みんなが幸せになるはず」との信念が固まった。

「現場に出てたくさんの人と話しながら模索する。これが大切」と力説する。幼児教育や障害者支援でも、「自立支援」がキーワードのようだ。

徹底した現場主義

在住日本人からは、「タイ国理解の学習会」の主催者としても知られる。研究者や学生、ビジネスマンなどさまざまな人が参加する学習会。20年近く前に始め、取り上げるテーマは政治経済や環境問題、地域開発、マンゴーなど幅広い。

バーンラック幼稚園事務局長　佐藤正喜さん（58）［タイ］　第240回

フットワークとネットワーク

「これは」と思ったテーマの第一人者を講師に招き、月2回のペースで開いている。「現場研究会」も3年半前から始めた。泊まりがけで天然資源、社会開発、企業・工場などの「現場」を訪ねる。

「在住日本人の中では、一番、地方や周辺国を回っている」と自負するほど各地を歩き回り、どの道に何があるかまで、しっかり記憶している。駐在員などにも、「本当の情報を得るにはバンコクだけ、自分の業界だけ、では駄目」と諭す。

昔から人をカテゴリーに分類して覚えるのが得意で、一度会った人は忘れない。人脈は次々と広がり、「フットワークを使って出会った人を、自分が持つネットワークでつなげたい」と目を輝かす。

あと10年、全力で

初めてタイに来た80年代。タイ駐在員といえば、「左遷・降格」という雰囲気もあったという。それが今は違う。「活気があり、優秀で品位の高い人材が集まっている。日本から見ても、『バンコクの日本人コミュニティー、すごいんだって？』と言わせるモデルを作りたい」

盤谷日本人商工会議所（JCC）で月報「所報」の編集委員なども務める。日系企業の社会貢献を「所報」で取り上げたいという。「日本社会は、いいことをしても隠したがる。もっと公にしてもいいのではないか」と訴える。

「全力でできるのはあと10年。だから、今やるべきことは今やる」佐藤さんの全力疾走は、まだまだ続く。

（タイ編集部・磯野三枝子）

1949年生まれ、明治大学農学部卒。全共闘運動が全盛期だった大学時代、授業や試験は放棄したが、おもしろい教授の自宅には押し掛けた。「秋田県人の内気なようで、地をはって努力する性格はタイに来ても変わらない」と笑う。中央と地方の格差や、農民の本当の事情を知りたいと各地に足を伸ばす。モットーは、「名もなく貧しく美しく」。

Copyright (C) NNA All rights reserved.